

## 議事録(議事要旨)[第2回会議]

1. 日 時 令和6年10月31日(月)15:00~17:00
2. 場 所 福井県庁地下1階 正庁
3. 議 題 (1)「第4期福井県教育振興基本計画」の骨子案について
4. 出席者 岩崎行玄座長、五十川早苗委員、荻原昭人委員、菊野昭彦委員、  
後藤ひろみ委員、澤田真由美委員、澁谷政子委員、高田五月委員、  
田中謙次委員、平井聡一郎委員、前田鎌利委員、吉川雄二委員
5. 議事要旨

### 【議題】

- 事務局から、第4期計画の骨子案について説明を行った。
- 委員から、チーム担任制について、一人の担任に負担が偏り過ぎない、一人の担任の考え方だけに偏って近視眼的な指導にならないようにという点で良い方法である一方、チームの作り方は慎重でないといけない。教員が個性を含めて力を発揮してもらうには、チームのバランス、組み合わせ、チームリーダーの資質が重要との意見があった。
- 委員から、医療・福祉機関との連携について、健康な子どもについては連携がなかった。予防教育や健康教育という観点では、例えば出前授業のようなものができる。精神科の視点では、例えば自殺予防や鬱、市販薬依存等のトピックスを取り上げて、背景にある生きづらさの問題や助けの求め方等について情報提供が可能であるとの意見があった。
- 委員から、デジタルに偏り過ぎるのも非常に危ない。デジタルの時代の中で活用力を上げていくことは必要だが、教員や生徒に力がついているのかを細かく検証していかなければならないとの意見があった。
- 委員から、新しいことや拡大することが沢山出ているという印象で、日々の検証の中で残すことは何か、辞めることは何かということも伝えた方が良い。何のためにやっているかわからないことは検証してやめ、その代わりに新しいこ

とをやる、という伝え方ができると現場の先生も受け入れやすいとの意見があった。

- 委員から、大綱に記載の「こどものためにアクション」の「アクション」の担い手は学校だけではなく、社会全体にしていきたい。社会と学校がそれぞれの立場で子どもを支える、という信頼関係が構築できれば、先生も安心して教育に従事できる。その転換期にあたって、「教育の魅力発信」が重要。学校現場の姿だけではなく、教育全体に対するビジョンを合わせて発信し社会全体と共有していくことが必要との意見があった。
- 委員から、計画は多岐にわたる。杓子定規に進めていこうとしても難しい。今回はそこに「大胆さ」も付け加えたい。計画の推進は大胆に、前例に囚われずに取り組まないと上手く行かないとの意見があった。
- 委員から、大綱においては、ふくい未来を担う、ふくい愛という点において、福井をいかに教育の中で楽しいもの、素晴らしいもの、このフィールドだからできる、ということを伝えることが重要という受け止めであるが、骨子案を見ると、まずDXと出てくるのでズレがあると感じるとの意見があった。
- 委員から、人がどこまでの自分の能力を伸ばせるという可能性を見せてあげたい。県内進学への入試対策強化とか地元のOBとの交流などは勿論大切だが、自分の能力をどこまでも伸ばしていくこともとても大切との意見があった。
- 委員から、問題解決能力を持つ人間が帰ってくる福井県になれると良い。自分も社会の一員だという認識を持った人に育てながら、能力を上げて、福井というフィールドとつながりながら帰ってこられるようなことが大切との意見があった。
- 委員から、「子どもが主役」について、子どもが主役だが先生も主役、その観点で働き方改革をしなければ良い教育ができないとの意見があった。
- 委員から、骨子案は内容が網羅されているが、同時に、引き算の発想をもう少し分かりやすく入れられると良いとの意見があった。
- 委員から、文科省が出している、学校の教師が担う業務にかかる3分類14項目のうち「基本的には学校以外が担うべき業務」については、行政が旗を振って

学校から切り離す検討を開始することを記載してはどうかとの意見があった。

- 委員から、コミュニティスクールの土台がある中、意思決定がまとまる学校をつくる段階へのアップデートに進められると良いとの意見があった。
- 委員から校長の育成、登用について、業務改善を実行できることもこれからの時代に必須の能力であるため、学校経営力に引き算力を必須としてはどうか。学校裁量についての引き算力への伴走を今後の教育委員会を行うべきであるとの意見があった。
- 委員から、網羅的に心を込めて書かれている。その上で、授業観や学力観の「転換期」ということが伝わる書きぶりができるが良いとの意見があった。
- 委員から、教員の働き方改革の「教員免許を持っていても今は従事していない人」を掘り起こしていくことは、現場の教員不足の中で待ったなしの施策。以前の教育観のまま現場に入ってしまうとハレーションが起きる。リカレントやリスキリングを行い、今の学校の状況を知ってもらうための一段階を現場に入る前に置き、推し進めている転換を逆戻りさせる力にならないように気をつける必要があるとの意見があった。
- 委員から、多くの教育が推進されており親としてはありがたい反面、教員の働き方改革につながるのか、教員の仕事が増えてしまわないかと思う。教育は学校だけで成り立つものではない。地域の人と連携して学校は地域と共に育てていく、ということをより推進してほしいとの意見があった。
- 委員から、学校の先生だけではなくて、教育・福祉・行政等が、子どもを真ん中においた横断できる仕組みを作ることで、不登校の子などが安心して学校に通えるようになり、その上で福井県が推進する教育を受けることにより、福井に戻ってきたいと思ってもらえるのではないかと意見があった。
- 委員から、基本理念について理念の先にあるものが見えてこない。私としては幸福だろうと考える。この大綱を基に進むことで、先生、子ども、地域、保護者、様々な人が幸福になるのではないかと。言葉が途中で止まっているように感じるとの意見があった。
- 委員から、部活動地域コーディネーターについて、しっかりと予算化することが

必要。キャリア教育の起点となって、産業化に向けた取組みができるのではないかと意見があった。

- 委員から、STEAM教育について、大事なのは「A」の部分のリベラルアーツやアート思考。本来は科学の力を持って社会の問題をどう解決するかという思考が重要。哲学や教養の部分を伸ばさなくては物足りない。この点も企業が協力できるのではないかと意見があった。
- 委員から、地域や地元企業の人との対話・会話を増やしてほしい。現在、学校の出前授業等をよく行うが一方的であるとの意見があった。
- 小中の連携について、お互いを教え合う環境を作ってはどうかとの意見があった。
- 委員から、アウトドア教育は是非進めてほしい。ここは学校の先生が頑張らなくても地域で活躍する人が沢山いるため、連携して先生も子どもと一緒にアウトドア教育を体験し、一緒に育つという考え方が良いとの意見があった。
- 委員から、大綱から基本計画を詰めていく流れがよくできている。ただ、細かいところまで記載しているため、途中が抜けている部分があると感じた。生きる力の育成、身に付ける力の部分をもう少し具体的なものとして打ち出しても良いのではないかと感じるとの意見があった。
- 委員から、DXは単なるデジタル化ではない。学校がこれからの変化の激しい社会に対応するために学校自身が転換、トランスフォーメーションすることを表している。「子どもが主役の教育」は学びのDX、働き方の部分で校務のDXという二面性があることが大切との意見があった。
- 委員から、学びのDXについて、高校卒業後は共通テストや大学入試問題がある。これらが大きく変わってきているが、高校入試の問題は変わっていない。高校入試が変わらないと中学校の教育が変わらないという課題意識は共通のものになっているとの意見があった。
- 委員から、校務のDXについて、子どもたちの前に先生のウェルビーイングを考える。先生が楽しく、学校楽しく、仕事が楽しくなかったらいい教育はできない。そのためには、やはり現在の仕事を減らすしかない。校務の効率化は限界であ

り、総量を削減しなくてはならない。やはり優先順位をつけていかないと立ち行かないとの意見があった。

- 委員から文科省の概算要求に学校管理職のマネジメント研修の充実があり、しっかりやっていくことが大切。学校教育法上、校長先生は教員ではなく経営者だが、そのためのトレーニングを受けてきていないため同時進行でやらなければならないとの意見があった。
- 委員から、幼小の接続について、幼稚園ばかりではなく小学校を大事にするべき。接続の段階での相互理解を大切にして、幼少中高大の連携が高めていくことが大事との意見があった。
- 委員から、子どもたちにも伝わりやすいメッセージで作られている。また、挑戦するとかチャレンジし続けるというワードが入っていたのも良い。何度でも何度でもチャレンジできる、間違った答えを言ってもその子が評価されていく、そんな環境になっていくのが望ましいとの意見があった。
- 委員から、プレゼンテーション教育について、プレゼンの指導力という点で、教員は教科書もなく手探り状態。オンラインでいつでも見られる環境が用意されると迷わなくて済むとの意見があった。
- 委員から、プレゼンテーション教育について、伝えて終わりではなく、それを実現するために皆でやってみようとか、どうやったら上手くいくか一緒に考えようというステップが必要。実際にやることは難しくても、そういう道のりがあるということを示せられると良いとの意見があった。
- 委員から、ふるさと教育は非常に大切。地域と連携した教育活動は重要で、子どもが戻ってきたいって思ってもらえるよう継続して取り組んでほしいとの意見があった。
- 委員から、教職員の働き方改革について、現場の先生がやりがいを持って仕事できるというのが一番重要。部活動をやりたい先生にはそういう選択肢も与えられる、その人にとってのやりがいを認められる、多様性を認められるルールがあると良い。生きる力の育成とあるが、そもそも生きる目的を見つけるということが今の子どもには大事。どういった職業だと安定するかなどよりも、何

のために自分たちは生きるのか、何のために勉強するのか。それを気付かせてくれるのは、一番身近な親でもなく、少し距離があるけれども身近な学校の先生が、毎日を楽しんで生きがいを持って生きていることのように思う。そうした先生が増えていくよう導いてほしいとの意見があった。

- 委員から、教育振興基本計画が網羅的になることは仕方ないが、5年間の中で継続してやるもの、徐々に増やしていくもの、減らしていくもの、今年度はこれを重視するといったメリハリがないと新規施策が多くどんどん増えていくような感覚になるとの意見があった。
- 委員から、チーム担任制を幾つかの学校で取り入れているが、一括りにチーム担任制を導入するのではなく、必要に応じてとか柔軟な形で取り組める表現を取り入れてほしいとの意見があった。
- 委員から、目に見える改革、実感できる改革が先生に伝わっていないとの意見があった。
- 委員から、部活動地域移行について、長野県では首長部局が主体となって取り組んでいる。始まりは学校だが、最終的には若者に取り込んで地域を活性化させるという地域づくりとして取り組み、それが引いてはふるさとにまた戻ってくる、地域の良さの発見につながるという。地域づくりに関するものとして県も主体的に関わってもらえると良いとの意見があった。
- 委員から、学校への依存度をいかに下げることが今後は必要。どの部分をアウトソーシングできるか。学校ではなく地域で解決してもらい、社会的な役割分担していく仕組みを、計画に盛り込まれるかは別にしても、将来的に考えていかななくてはならないとの意見があった。
- 委員から、教員の人材確保について、採用試験のあり方の見直しを行うことが必要。時期を前倒しにすれば沢山集まるようなものではない。現在のやり方のメリットとデメリットを整理し、どうすれば力のある先生を確保できるのかという見直しについて、計画に盛り込むべきとの意見があった。
- 委員から、これからの時代では、SDGsやGX等の考え方が大切であるため、そのような学びに関する取り組みがあると良いとの意見があった。

- 委員から、グローバル教育について、県内でもグローバル化が進み、外国人が増加していることを踏まえて、県内在住の外国人との交流を行うなどの観点もあると良いとの意見があった。
- 委員から、教員養成の研修等をしていく際に、県内大学と連携して育てていくということを、福井県の人材確保における強みや魅力としてはどうか。との意見があった。
- 委員から、細かなところに配慮された計画になっている。優先順位を明らかにして取り組んでほしいとの意見があった。
- 座長から、この骨子案は教育委員会からの提案で、フォアキャストの考え方で、継続すべきことや、やれることをちゃんとやっていこうという現実的な提案。一方、外部委員の方々はそれぞれの実体験を踏まえた、教員の目では見落とすかもしれない、教育にあってほしい姿を提案してもらえた。これはバックキャストの考え方。現場が疲弊しないよう、フォアキャストでやれることをしっかりやった上で、適度にバックキャストを入れていくべきとの意見があった。
- 座長から、学びの三要素や人間力が入っているのが良い。教育の根幹はこの三要素との意見があった。
- 座長から、県内で学んだ子どもたちが、これからの社会が自分たちでは読めない大きな変化をする中で、その変化に抵抗感がない、私たちに任せてくださいと言えるような若者を育成できれば福井県の教育は成功と言えるとの意見があった。
- 委員から、「キャリアデザイン」ではなく「ライフデザイン」という言葉が使われるようになったのが良いとの意見があった。
- 委員から、KPIに縛られすぎてはいけないが、目指すものとして必要。目標を持って特色ある学校を増やしていくことが必要との意見があった。
- 委員から、これからのオンラインの時代、人間がやらなくて済むことは機械がやってくれる時代に、どうやって子どもたちをより幸せに生きられて、より活躍できる人に導いていくのかというところに論点を持っていかなくてはならないとの意見があった。

- 委員から、社会で様々な経験を持った人を教え手に招いて探究の授業を進めていく試みが、県内各地で進められ、効果的にもなっているとの意見があった。
- 委員から、先生が自分で何もかも抱えて自分が教えなくてはいけないという考えを転換し、外の力を借りて教えることも良いことだという形に弾力的に進め、制度的なこともできてくると良いとの意見があった。
- 委員から、基本計画の中身を広く知ってもらうことも大切だが、学校用語で記載されておりこのままでは浸透しない。これをやるとどうなるという具体的な形で見せていくことが必要との意見があった。
- 委員から、企業側としては一度限りの会を持ったり、教えたりして終わりではなく、そこからキャリア教育を進めていくことが大切との意見があった。
- 委員から、ギフテッドと呼ばれる子どもも認めて伸ばしてあげられる、下も上も伸びしろを伸ばしていくことが大事になってくる。それが「一人一人の個性輝く」につながるとの意見があった。
- 委員から、福井県の先生は真面目なため、いろんなことをやっている。大綱や計画に記載の取組みを行うには、先生に準備の時間をしっかり与えてあげないと実現には近づかない。何をやめるのかを現場ではなくトップダウンでやっていけないといけないとの意見があった。
- 座長から、日本は完璧主義やフェアネスが好きである。特色ある取組みは様々できるが、全員が全部をできないので、個々の学校がそれぞれ特化してやっていくということを許容してもらえるか。「フェアネスじゃない」と保護者が主張すると、全部の学校が全てやらなければならない。いいところを活かしながら、とにかく元気な子を育てることが目的であり、個別の違いについて保護者に理解を求めることができれば良い環境になるとの意見があった。

#### 【その他】

- 事務局から、今後のスケジュールについて説明した。